

エリス・ヨッフエ著

『毛以後の中国軍』

Ellis Joffe, *The Chinese Army after Mao*,
ケンブリッジ (マサチューセッツ), Harvard Uni-
versity Press, 1987年, ix+210ページ

浅野 亮

エリス・ヨッフエはヘブライ大学 (イスラエル) の教授 (中国研究・国際関係担当) であり, 世界的に知られている中国の軍事問題の権威の1人である。ハーヴァード大学に学び, その後ミシガン大学, オーストラリア国立大学, オクスフォード大学セント・アントニー・カレッジなどにおいても研究を積み重ねた。

この『毛以後の中国軍』は, 発行直後より *China Quarterly*, *Foreign Affairs*, *Journal of Asian Studies*, *Orbis*, *Pacific Affairs* など国際問題や中国問題の専門雑誌に批評や紹介が掲載されているばかりでなく, 中国の軍事問題に関する論文にも早々に引用され始めている, 評判の高い本である。

ここでは, Iで本書の構成を紹介し, IIにおいて, この研究について簡単に論じてみることにする。

I

最初に, この本の内容構成を目次に沿って紹介しよう。なお, 各章節の表題は, 直訳ではなく, 意識である。

第1章 毛沢東の遺産

1950年代における軍事建設, 中国軍とソビエト, 大躍進と「人民戦争」への回帰, 林彪のリーダーシップ, 文化大革命における人民解放軍。

第2章 政治と脅威認識

政治的枠組, 「第2の革命」と軍, 脅威認識と軍事政策, 軍現代化の意義。

第3章 新しい軍事政策

兵器取得と防衛支出, 兵器の輸入政策, 新政策の意義。

第4章 「現代的な条件下の人民戦争」——変動する軍事ドクトリン——

毛沢東の軍事ドクトリン, 「現代的な条件下の人民戦争」, 「現代的な条件下の」核戦争, ドクトリンの変

化と民兵, ドクトリンの変化と海軍, 「人民戦争」か「現代的な条件」か。

第5章 兵器と装備——時代遅れでも改善へ——

1970年代後半の人民解放軍, 軍事産業の役割, 兵器の現代化, 兵器の輸出入, 評価。

第6章 人民解放軍の改革——プロフェッショナルリズムの優先——

将校団, 古参将校の引退, 小さな軍隊へ, 構造とスタイルの能率化, 現代戦争の訓練, 評価。

第7章 政軍関係——鄧小平による指導——

兵営への回帰, 中央と地方, 政治指導の回復, 政治的意見の不一致と政軍関係。

結 論

第1章では, 軍をきわめて重視していた毛沢東が, なぜ, 人民解放軍の軍事能力の発展をおろそかにしたのかというヨッフエの基本的な問題意識が提示され, 1950年代から文化大革命までの軍をめぐる歴史が簡潔にまとめられている。

第2章では, 鄧小平の台頭という政治的な枠組の変化のもとでの, 脅威認識の変化と軍事政策の変更を扱っている。かつて中国は, 大規模戦争が不可避であるとしてきたが, 鄧小平は, 平和は勝ちとることができるとし, 軍は臨戦体制から平和時の軍現代化に政策を転換した。

なお, 節の一つの「第2の革命」にヨッフエは定義を与えていないが, 一般には, 四つの現代化に伴う価値と政治・社会組織の再編成を指す場合に使用される語句である。

第3章では, ヨッフエは, 中国の兵器輸入がきわめて限定された規模である理由を次のようにあげている。第1に, 経済建設への資金集中のため, 軍の現代化のための予算が限られていること, 第2に, 兵器供給が必ずしも安定しているとはいえない。さらに, 第3章ではないが, この本の結論において, 兵器輸入が緊急とはみなされないのは, まさに中国がさしせまった脅威を認識していないことの表われであるとしている。

第4章は, 粟裕, 徐向前, 宋時輪らの諸論文をもとに, 毛沢東思想の正統性をそこなわずに戦略思想の転換をはかるといふ難題を軍はいかに扱ったかをみている。「現代的条件下の人民戦争」は, まさにぎりぎりの妥協であったとヨッフエは把握している。さらに, 戦略思想の転換の例として, 民兵の重要性の低下と海軍の発展を挙げている (なお, この章で, 中国は戦術核部隊を持たないとしているが, 1988年1月8日の北京放送による

と、戦術ミサイル部隊をすでに保有している)。

第5章では、兵器ハードウェアの現代化を解説している。その水準はかなり高くなったが、ソ連の水準からはほど遠いと観察している。また、第三世界を主な市場とする兵器輸出を重視し、(1)供与から販売、(2)兵器工業の発展、(3)兵器市場の開拓の点にその特徴の変容をみている。

第6章は、軍現代化改革の過程をみている。専門知識の重視とそれによる研究教育の機関(国防大学など)の設立、訓練へのシミュレーションの利用、補給の重視、管理等における経済主義の導入、服務規定の制定、古参幹部の引退とその対策(福利厚生など)、そして軍の削減(最高時450万人)などにそれぞれ簡単に触れている。

第7章および節の一つの題名に表われる「政軍関係」という語句は、“civil-military relations”の訳である。“civil”は、厳密には非軍事部門すべてを含む語句であるが、章の主な内容が、政軍関係すなわち党・行政部門と軍の関係であるので、ここでは、「政軍関係」と訳出した。ヨッフフェは、鄧小平はその政治指導のために軍の支持を必要としているが、それに依存はしていないと観察している。軍が政治への介入から手を引く過程と背景を、政治局・中央委員会における軍人比率の低下、公安部門の移管、軍区司令官の政治的力の低下などを通して分析している。軍に対する政治的コントロールの手段として、鄧小平の腹心の重要な地位への任命をあげている。

本書におけるヨッフフェの関心の中心は、鄧小平の指導下に発生した、中国人民解放軍の軍事ドクトリン・兵器や装備・軍の体制等における大きな変化である。分析の基礎は、鄧小平の政治指導下に中国の脅威認識が変化し、毛沢東流の「人民戦争論」は事実上廃棄され、正規戦争の方法が大幅に取り入れられたとみる枠組である。装備や軍の組織改革にも言及した章は、大体において軍事ドクトリンの変化と関連づけて論じられている。

本書は、索引をいれて210ページという限られたスペースのなかで、毛以後の解放軍の変容の推移を叙述するだけでなく、その構造や背景の解明をも試みている。その結果、構成やプレゼンテーションにいささか混乱があるようにも見える。たとえば、第4章は、内容からみて一前章(第2章)の議論を前提としており、また第5章は、第4章ではなく、明らかに第3章の続きである。

章の内容がとびとびとなるのは構成上認められるとしても、本書は、ほとんどの章が約25ページに平均して押

し込まれ、そのなかで、多くの側面と背景を扱おうとするので、強調しようとする点の所在が不明確となる傾向がある。

II

有限のスペースのなかで触れられない点があるのは避けがたいことであり、本書もその例外ではない。ここでは、解放軍研究における位置づけを論じた後、特に将来の研究に重要と思われるにも関わらず、十分に論じられなかった点を選んで扱うこととしたい。

1. 解放軍研究のなかでの位置づけ

ヨッフフェの研究は、(1)主な関心対象が軍のハードウェアではなく、軍事ドクトリン・戦略とその変遷である、(2)中国の政治と対外政策との関連をも重視する、(3)人民戦争賛美も正規化賛美もしない、という点からみると、平松茂雄教授、ギッティンクス(J. Gittings)らの系列に属するものともいえよう(注1)。英語による解放軍研究では、1978年から始まった解放軍の変容に関する包括的なまとめとして高く評価できよう。

また、内容自体ではないが、上記の研究との共通点として、1人で中国軍の軍事原則・戦略・ハードウェアをカバーしている点もあげられよう。この点、シーガル(G. Segal)とタウ(W. Tow)、またラブジョイ(C. D. Lovejoy)などにより編集された研究とは異なる(注2)。

ちなみに、本書の執筆にあたり、シーガルとの議論が役立ったということである。2人の論文には、主張や表現の相違はあるものの、構成の点で、相互の影響が見られる。解放軍の変容はきわめて広範囲であり、さらに深化すると思われるので、1人の研究者による包括的な論文の執筆は、困難になりつつあるようである。

2. 士気について

解放軍の直面している重大な問題の一つは、資金、装備、制度のような目につきやすいものではなく、規律の混乱や訓練の軽視などにみられる士気の退廃である。いかに装備や制度を改善しても、士気の低いままで強大な軍の建設が可能かどうか大いに疑問である。

軍機関誌『解放軍報』は、規律の混乱と訓練の軽視の報道をひんぱんに報道し、これが深刻な問題となっていると警告している。この直接の理由の一つとして、正規軍化を求める一方で、軍現代化の資金捻出のために、軍が営利を追求するよう指導部が指令した矛盾に求めることができる。

士気の緩みという問題は、軍指導部の指令の矛盾から

発生した面もあるが、より基本的には、臨戦体制から平時の体制への移行に伴う緊張の緩和という面もあるであろう。そればかりではなく、入隊希望者の減少にみられるように、解放軍の中国社会における地位の相対的低下とも関連する面があり、軍の引き締め政策のみでは解決困難なものである。

一般に、ヨッフエのみならず、欧米の解放軍研究者は、士気などインタンジブルな要素を軽視する傾向が時としてみられ、逆に日本人研究者のほうが注目しているようである。

3. 政軍関係について

今後の解放軍の動向をみるうえで、不確定要素の最も多く、しかも兵器開発や軍の改革など他の争点にも大きな影響を与えるのは、政軍関係ではないかと思われるのでここで触れることとしたい。

軍が鄧小平の指導に概ね服従してきた主な要因として、ヨッフエは鄧の個人的威信と腹心の重要なポストへの配置を挙げている。それらの重要性は否定できないが、より基本的には、政治指導および政治指導部の安定が大きな前提として指摘されなければならないであろう。さらに、政治指導および指導部の安定の重要な規定要因として、イデオロギー問題と経済政策の成否がある。イデオロギー問題は、胡耀邦失脚劇の示すように、簡単には解決できない。中国の経済政策の成否は、イデオロギー問題を尖鋭化させ、政治指導部の分裂と軍の政治介入を招きかねない。

4. 解放軍現代化の国際的インパクト

本書はまた、解放軍の現代化に伴う国際環境（特に近隣諸国またグローバルなバランス）への影響を十分に取扱いしていない。ソ連との関係の着実な改善は、解放軍の現代化の緩慢さの重要な理由の一つであり、ヨッフエも随所でこれに触れている。ベトナムについては、中越戦争との関連で簡単ではあるが、言及がある。

しかし、東南アジア諸国や日本等の近隣諸国に対して、軍の現代化のもつインパクトは分析の対象とはなっていない。領土問題や華僑問題をかかえる東南アジア諸国にとり、軍事的に強化しつつある中国は、政府関係者のみならず国際問題研究者の一部にも、脅威として映っているようである。また、日本は、対中警戒心の表明が容易ではない国の一つであるが、インフォーマルに警戒を示す人々もいないわけではない。

中国軍の現代化の近隣諸国に与える影響という問題は、主に、核と海軍の発展の面から注目され始めてい

る(注3)。

グローバルなバランスに関連するものとして、INFとSDIについてみてみよう。INFでは、INF条約署名という進展がみられたのは本書発行後であるので、言及のないのは仕方がない。しかも、INFの中国に与える影響は、当面間接的なものとも考えられるので、進行中のINF交渉についての議論を割愛したのもうなづける面もある。

他方、SDIについては、第3章で1ページほど議論しているのみである。しかし、INFと異なり、ヨッフエも認めるように、SDIは、中国の核報復を無力化しうる点で、中国の核戦略に重大な影響を及ぼすものであり、この点をもっと掘り下げてよかつたであろう。中国の探ると思われる主な対応の一つは、核兵器の増加であり、もう一つは電子技術への重点投資であろうが、現在のところ、そのどちらも観察されていない。SDIについて、中国のメディアは、ごく限定された論評のみしかしていないが、これは中国指導部はSDIに対しては効果的な対応策を見つけにくく、苦慮している間接的な証左であるかもしれない。

このような短所はあるものの、本書は、英文の包括的テキストとしてきわめて優れ、中国の安全保障と解放軍について議論するためのたたき台や教科書として参照すべき必須の古典の一つとなるであろう。

なお、解放軍の軍事ドクトリンの変容に注目したヨッフエによる研究として“People's War under Modern Conditions': A Doctrine for Modern War,” *China Quarterly*, 第112号, 1987年12月, 555~571ページがある。

(注1) 平松茂雄『中国の国防と現代化』勁草書房 1984年/Gittings, John, *The Role of Chinese Army*, ロンドン, Oxford University Press, 1967年。

(注2) Segal, Gerald; William Tow 編, *Chinese Defence Policy*, ロンドン, Macmillan, 1984年/Lovejoy, Charles D., Jr.; Bruce W. Watson 編, *China's Military Reforms: International and Domestic Implications*, ボールダー(コロラド), Westview Press, 1986年。

(注3) Segal, Gerald, “As China Goes Strong,” *International Affairs* (ロンドン), 第64巻第2号, 1988年春, 218~231ページ。

(日本国際問題研究所研究員)